

アチェにおける 防災学校プログラムの展開

ムハンマド・リダ シアクアラ大学津波防災研究センター
Muhammad Ridha (TDMRC)



私ども津波防災研究センターでは、2006年から防災学校の試みをしてきました。ここで重要なのは、防災に関する知識をどのようにしてわかりやすく人びとに伝えるかということと、それを通じて実際の行動にどのように結びつけるかということです。

関係各所、国内外と協力しながら 防災教育を推進

防災教育にはいくつかの段階があります。教育を通じて人びとに伝えることもありますし、防災に強い建物をつくること、あるいは避難所をつくる設計を後方から支援するということもありますし、実際に避難訓練を行なうことも必要です(資料15-1)。

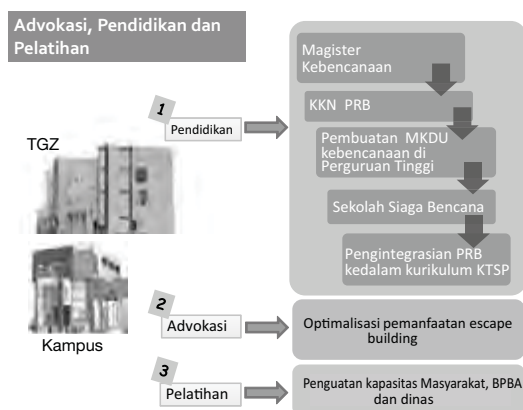
このたび法制度が若干変わって、実際に防災の学校をつくることになって、防災学校を自治体に移すことができるようになりました。この活動にあたっては、インドネシア科学院(LIPI)をはじめ、NGOや海外の10機関とも連携しています。また、今回のワークショップを支援しているJST-JICA地球規模課題対応国際科学技術協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」も連携して行っています。

資料15-2は防災学校をつくる計画のモデルです。重要なのは、最初に関係する機関がうまく連携して合意することです。その後で学校の運営や教員の養成、人材の開発が必要になってきます。

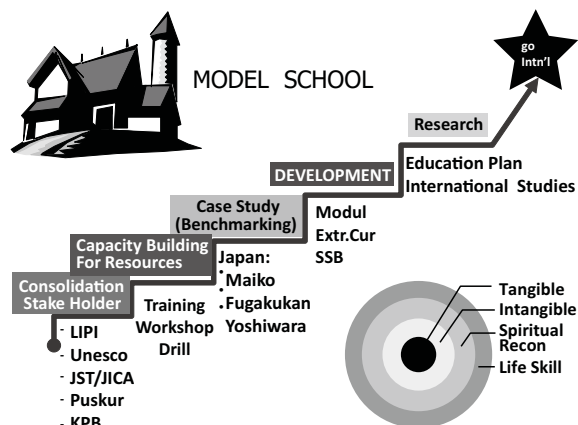
日本のいくつかの地域の事例も参照しながら進めています。その後さらにモデルづくり等が入ってきます。そのうえで、インドネシア社会に合ったかたちに変えると同時に、国際的な標準にも合うような研究調査を進めて防災マップを構想していきます。

防災学校の目的は、災害対応に関する知識と、実際に行動に移す姿勢を育てることにあります。また、緊急時にも対応できるようにしています。

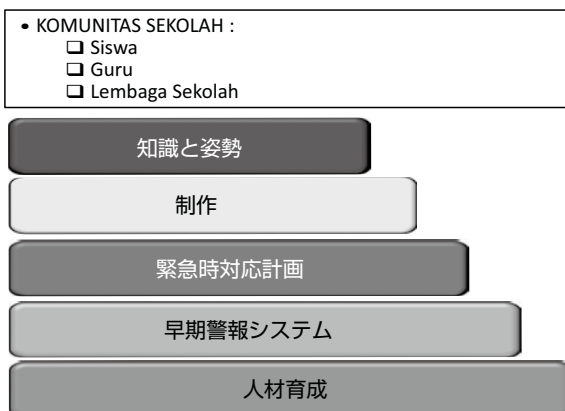
資料15-3は学校に関係する人たちについて確認するものです。学生、先生、それから学校機関そのものと関わる人たちがいくつかに分かれています。それらの



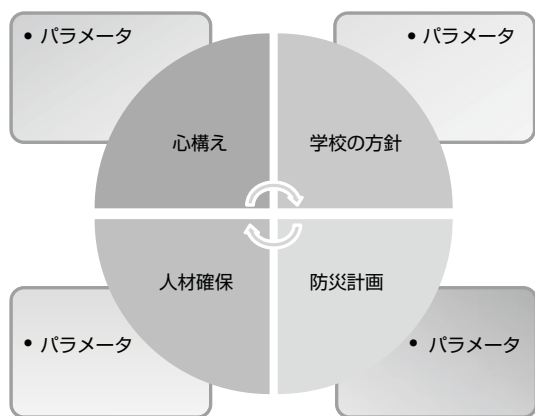
資料15-1 防災教育の段階



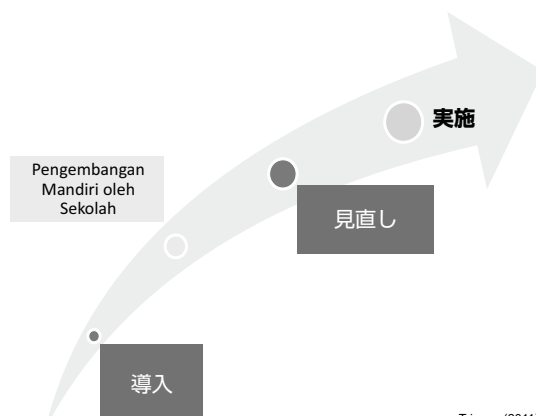
資料15-2 防災学校をつくる計画のモデル



資料15-3 五つの指標



資料 15-4 防災教育の四つのパラメータ



資料 15-5 防災学校をつくる三つの段階

Triyono (2011)



資料 15-6 防災学校をつくる三つの段階



資料 15-7 防災訓練のようす

人びとがどのように活動しているのかについて、五つの指標を設定しています。

このほかに四つのパラメータという考え方もあります(資料15-4)。災害が発生したとき、また災害が発生する前に、どのように行動しなければいけないのかについて教育します。訓練をしたり、知識を学んだりなどを通じて、知識を身につけ態度を育てます。

■ 目標と計画、ステップを明確にして モデル校を選定して取り組む

防災教育を進めるうえでは、公的なかたちで進めること、また制度的にきちんと裏づけのあるかたちで進める必要があります。予算をどのようにとるか、また関係諸機関とどのような合意を最初にとらなくてはいいかないのかといった知識も共有します。また、緊急時にどのような行動を取るべきか、あらかじめさまざまなかたちで想定することも必要です。

私たちは、早期警報システムの準備も進めています。住民の意欲を高めることについてもさまざまな方法で試みています。

資料15-5は防災学校をつくるうえでの段階を示した図です。それぞれの学校が自分たちですべて運営で

きるようにすることが到達目標ですが、そのあときちんと評価をして、さらに連携でなにができるのかを考えたいと思います。

その進め方については、資料15-6にあるような三つの段階から考えています。学校自体の回復、立て直しが必要ですし、そのあと基本的な知識を伝える段階があって、それから実践に移すという三つの段階を考えています。

こうした活動に十分な検討を加えた後に、防災学校が実際にかたちになると考えます。評価にあたっては、先ほど挙げた4ないし5の指標を使います。

このような防災学校として、私たちはいくつかのモデル校を選んでいきます。資料15-7は防災訓練のようすです。モデル校になった三つの学校はいずれも津波博物館が避難所になっています。

TDMRCでは防災学校のモデルを年ごとにいくつかの学校で取りくんでいきたいと思っています。それぞれの学校が防災教育に取り組むにあたってはTDMRCを始めとするさまざまな機関と連携しています。